

『源氏物語』の円環する言葉

——女三宮降嫁後の紫上の心情表現

岡田 ひろみ

一 縁と研究会

『文學・藝術』四三号は「音」の特集号で、その編集後記には次のようにある。

次号の特集テーマは、「輪」である。二〇二〇年に日本で開催されるオリンピック（五輪）に因んだものであるが、文学・芸術の観点から、「輪」がどのように扱われることになるか。次号を楽しみにしていただきたい。すでに「輪」をめぐるサロンがほぼ毎月、開かれている。

ご存じのとおり、二〇一九年冬以降、世界規模でのコロナ禍のため、二〇二〇年の五輪は延期となり、大学での授業もオンライン中心となった。このサロンも中止を余儀なくされたが、大学・学部をめぐる様々な事情も乗り越えて、今回の「輪」が特集号として刊行されたことを非常に嬉しく思うし、関わった先生方に感謝したい。ただ、私自身、サロンに参加していたものの、「輪」というテーマについて担当する機会をもたずにコロナ禍になってしまった。

私事になるが、本学で「源氏物語研究会」という読書会を主宰して二十年近くになる。今は鬼籍に入られたが、二〇〇八年まで文芸学部にいりした西村真一先生の「岡田さん、源氏物語の読書会を主宰してくれませんか」という一言からはじまった研究会である。現在も、在学生、院生だけでなく、卒業生や在職の、退職された先生方にもご参加いただける形で続いているのは、西村先生が「ご縁」を作ってくださったからだと思ふ。この会は「研究会」という名前がついているものの、内容的には「読書会」で、基本的に私の講読を中心としながら、場面場面で立ちどまりながら全員で話あってゆくスタイルをとる。発話してゆく中で気づくこと、意見交換で気づくことも多い。今回記すのは、この源氏物語研究会の場で考えた、「円環」する言葉から読む紫上の心情である。

二 『源氏物語』における円環する言葉の諸相

まず最初に、『源氏物語』における円環する言葉の諸相について触れておきたい。次にあげるのは、都を離れ須磨に居を移した光源氏とその供人たちが、主従で和歌を唱和する場面である。

初雁^{はつかり}は恋しき人のつらなれや旅の空とぶ^{とぶ}声^{こゑ}の悲しき（光源氏）

とのたまへば、

かきつらね昔のことぞ思ほゆる雁はその世のともならねども（良清）

民部大輔、

心から常世をすててなく雁を雲のよそにも思ひけるかな（惟光）

前右近将監、

「常世いでて旅の空なるかりがねもつらにおくれぬほどぞなくさむ（前右近将監）」

友まどはしては、いかにはべらまし」と言ふ。(須磨②二〇一―二〇二頁)

唱和歌は、その場に居合わせた人たちが統一された意識や心情で和歌を詠み、そのグループの連帯を図るものである。和歌の言葉も自ずと重なってゆく。光源氏が詠み込んだ「雁」「つら」を受けて、良清は「かきつらね」「雁」の語を用い、良清の「世」「思ほゆる」を受けて、惟光は「常世」「思ひ」の語を用い、惟光の「常世」「なく」を受けて、前右近将監は、「常世」「ね(音＝鳴き／泣き声)」と詠んでゆく。一人目の歌の言葉を用いながら、二人目が詠み、二人目の言葉を用いながら三人目が詠む。三人目の言葉を用いながら四人目が……と続いてゆくわけだが、四人すべてに「雁」の語が含まれており、群れで飛ぶ「雁」という言葉を四人全員が用いることで主従の連帯が表現されてゆく。何より四人目の前右近将監の歌は、「旅の空」という言葉を用いて、光源氏詠の「旅の空」へ回帰し、四人目から一人目へ、という形で円環構造をもって、和歌の言葉がめぐってゆくのである。一方で、主従の連帯を示すだけでなく、「友まどはしては」と言う右近将監と「恋しき人」を恋う光源氏の思いの位相差も浮かび上がらせる。「友」の在・不在の中に光源氏は入りえないし、そもそも光源氏が求めているのは「恋しき人」なのだ。主従の連帯が緊密であればあるほど、従者には受け止められない光源氏の孤独感も浮かび上がらせることになる。

別の形の唱和歌も引く。

桐壺院逝去後、藤壺は里邸である三条宮に戻った。迎えの兵部卿宮をはじめ、光源氏も参集し和歌を詠む。

御前の五葉の雪にしをれて、下葉枯^{したは}れたるを見たまひて、親王、

かけ^か広^{ひろ}み^みたのしみ松や枯れにけ^{したは}下葉散りゆく年の暮れかな(兵部卿宮)

何ばかりのことにあらぬに、をりからものあはれにて、大将の御袖いたう濡れぬ。池の隙^{ひま}なう凍れるに、

さえわたる池の鏡のさやけきに見なれしかげを見ぬぞかなしき（光源氏）

と思すままに、あまり若々しうぞあるや。王命婦、
わうみやうぶ

年暮れて岩井の水もこほりとぢ見し人かげのあせもゆくかな（王命婦）

そのついでにいと多かれど、さのみ書きつづくべきことかは。（賢木卷②一〇〇頁）

兵部卿宮は「下葉枯れたる」を、光源氏は「池の隙なう凍れる」を見て詠むという形で、別の風景から触発された和歌であるが、三者で「かげ」の語が共通する。「かげ」とは亡き桐壺院のことであり、同じ語を用いることで「かげ」となつて庇護してくれていた桐壺院の喪失の嘆きが共有されてゆく。しかし、須磨巻と比較するとその言葉の照応は微々たるものであり、三人目の歌は二人目と照応しても、一人目に回歸することはない。もちろん、「そのついでにいと多かれど、さのみ書きつづくべきことかは」とあり、他の多くの和歌は省筆したということなので、物語世界において王命婦の歌が最終詠ではないが、須磨巻とは随分密度が違ふ。

場面や巻を超えて、親と子で円環構造がとられることもある。有名な桐壺院と光源氏の父と子の照応である。それは、桐壺巻において、桐壺更衣を失つた悲しみは、白居易の「長恨歌」に描かれる、楊貴妃を失つた玄宗皇帝の悲しみと重ねて描かれる。

かの贈物御覽ぜさす。亡き人（桐壺更衣）の住み処尋ね出でたりけんしるしの釵かんざしならましかばと思ほすもいと
かひなし。

たつねゆくまぼろしもがなつてにても魂たまのありかをそこと知るべく（桐壺巻①三五頁）

「亡き人の住み処尋ね出でたりけんしるしの釵ならましかば」とは、玄宗皇帝が道士に命じて楊貴妃の魂のありかを尋ねさせ、仙山にいた楊貴妃から形見の釵を得た話を下敷きとする。桐壺院は、桐壺更衣母からもたらされた「贈物」を「しるしの釵ならましかば」と嘆く。桐壺院の詠歌は、「臨邛の道士鴻都の客 能く精誠を以つて魂魄を致く」〔長恨歌〕とあるように、「魂のありか」を知るための「まぼろし」がいてほしい、と「かひな」きことはわかっていても、桐壺更衣の魂を求めずにはいられない思いを詠んだものである。

そして、幻巻。幻巻は、光源氏の物語の最終巻でもある。光源氏の紫上追慕の情に集約される巻でもあるが、十月、雁を見て光源氏は次の和歌を詠む。

雲居をわたる雁の翼も、うらやましくまもられたまふ。

大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ（光源氏）

何事ごとにつけても、紛れずのみ月日にそへて思さる。（幻巻④五四五頁）

言うまでもなくこの和歌も「長恨歌」を下敷きにするが、何より桐壺院が詠んだ和歌と極めて類似する。「まぼろし」という言葉は、『源氏物語』全体を見渡しても、この二例のみしかなく、幻巻の光源氏のこの和歌は、桐壺院の詠歌を呼び込む。桐壺更衣を失った桐壺院の悲しみと、紫上を失った光源氏の悲しみが重ねられ、桐壺更衣が桐壺院の最愛の人であったとすれば、紫上も光源氏の最愛の人であったということにもなる。ただ、須磨巻と同様、そのしみと同じくらい、桐壺更衣を失った桐壺院の悲しみは深かった、ということにもなる。ただ、須磨巻と同様、その差も浮かび上がる。桐壺院はその後、更衣と似た藤壺を得て心の平安を得るが、光源氏にはそれが無い。桐壺巻の詠歌は「秋」であり、幻巻の詠歌は「冬」とあるという季節の違いにもあらわれている。長恨歌そして、「まぼろし」

による「魂」の探索という点で重なるがゆえに、父子の違いも考えたくなる。必然的に桐壺巻に戻って読み直しを図らせられる構造となっている。言葉の重なりが、場面を繋ぎ、巻を繋ぎ、人を繋ぐ。

三 女三宮降嫁後の紫上の心情

朱雀院鍾愛の姫宮である女三宮の光源氏への降嫁の儀は、盛大にとりおこなわれた。

A 三日がほど、かの院（朱雀院）よりも、主の院方（六条院＝光源氏）よりも、いかめしくめづらしきみや

びを尽くしたまふ。対の上（紫上）も事にふれてただにも思されぬ世のありさまなり。げに、かかるにつけて、こよなく人（女三宮）に劣り消たることもあるまじけれど、また並ぶ人なくならひたまひて、はなやかに生ひ先遠く侮りにくきはひにて移ろひたまへるに、なまはしたなく思さるれど、つれなくのみもてなして、御渡りのほども、もろ心にはかなきこともし出でたまひて、いとらうたげなる御ありさまを、いとはありがたしと思ひきこえたまふ。姫宮は、げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いといはけなき気色して、ひたみにち若びたまへり。（若菜上巻④六二―六三頁）

当時婚儀は三日間続く。紫上は「ただにも思されぬ（平静ではいられぬ）」様々な思いを胸に秘めながら、「つれなくのみもてなして（何気なく装って）」、光源氏とともに、女三宮降嫁の準備をする。紫上の犠牲の上に手に入れた女三宮だが、光源氏が婚儀で見たのはあまりにも幼く子供っぽい姿だった。

婚儀が続く三日間、当然ながら光源氏は連続して女三宮の元に行かねばならず、物語は改めてその三日間を具体的に記してゆく。

B

三日がほどは、夜離れなくわたりたまふを、年ごろさもならひたまはぬ心地に、忍ぶれどなほものあはれなり。御衣などもなど、いよいよたきしめさせたまふものから、うちながめてものしたまふ気色、いみじくうたげにをかし。(若菜上巻④六三頁)

再び「三日がほどは」と書き始められる。前述のA「三日がほど」とは別視点での叙述を改めてしているわけである。女三宮のもとに「夜離れなく」ということは、紫上の夜離れが三日続くということでもあり、紫上は思いを「忍」(隠し)びながら、光源氏が新妻(女三宮)のもとにゆく支度を手伝う。紫上が思いを隠していること、それを見て、光源氏がAB「らうたげ」と感じる事が繰り返し描かれる。A「並ぶ人なくならひ(紫上に並ぶ寵愛を受ける人はいないのが常)」であったのが、B「ならひたまはぬ(常でない夜離れ)」を経験することになる。

「三日がほど」という時間軸が繰り返された中、紫上の思いは、類同する言葉を重ねることで綴られてゆく。

C

年ごろ、さもやあらむと思ひしことどもも、今はとのみもて離れたまひつつ、さらばかくにこそはと、うちとけゆく末に、ありありて、かく世の聞き耳もなのめならぬことの出で来ぬるよ、思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、今よりもうしろめたくぞ思しなりぬる。さこそつれなく紛らはしたまへど、さぶらふ人々(紫上付きの女房たち)も、「思はずなる世なりや。……」(若菜上巻④六五頁)

紫上は、B「年ごろさもならひたまはぬ心地」(④六三頁)がする一方で、C「年ごろ、さもやあらむと思ひしことども(光源氏と高貴な姫君の結婚)」もないわけでなかったがそれも今更と油断していた中、女三宮降嫁がもちあがってきたことを思う。将来を不安に思いながらも、紫上は女房の前でも「つれなく紛ら」わす。

何より、繰り返されるのは、紫上の「ただならぬ」思いである。光源氏が女三宮のもとへ渡る前、紫上は光源氏のと看りで手習歌を書き付けていた。

D ……言ふかひなげにとりなしたまへば、（光源氏は）恥づかしうさへおぼえたまひて、
 寄り臥したまへれば、（紫上は）硯を引き寄せて、

目に近く移ればかはる世の中を行く末とほくたのみけるかな（紫上）

古言^{ふること}など書きまぜたまふを、取りて見たまひて、はかなき言なれど、げに、とことわりにて、

命こそ絶ゆとも絶えめさだめなき世のつねならぬなかの契りを（光源氏）

とみにもえ渡りたまはぬを、「いとかたはらいたきわざかな」とそそのかしきこえたまへば、なよやかにを
 かしきほどにえならず匂ひて渡りたまふを、見出だしたまふもいとただにはあらずかし。（若菜上卷④六四

～六五頁）

紫上の和歌はもはや光源氏に向けて詠まれず、光源氏の和歌は、紫上の用いた「かはる世（変わる夫婦仲）」という言葉を「さだめなき世（不定の世）」のつねならぬなか（夫婦仲）」と詠みかえて紫上への変わらぬ愛情を歌う。そして、女三宮のもとへゆく光源氏を紫上が勧めるかたちで見送らねばならない苦渋を語り手は「いとただにはあらずかし」と推測するのである。

この「ただならぬ」思いとは、女三宮婚儀の際、A「対^{たい}の上（紫上）も事にふれてただにも思されぬ世のありさまなり」（④六二頁）に既に記されている思いでもあったが、このあとも主体を変えて、何度も繰り返されてゆく。

E かう人（女房たち）のただならず言ひ思ひたるを、（紫上は）聞きにくしと思して……（若菜上④六六頁）

F（紫上）「……等しきほど、劣りざまなど思ふ人にこそ、ただならず耳たつこともおのづから出で来るわざなれ、かたじけなく心苦しき御事なめれば……」（若菜上卷④六七頁）

G 昔は、ただならぬさまに、使ひ馴らしたまひし人どもなれど、年ごろはこの御方にさぶらひて、みな心寄せきこえたるなめり。（若菜上④六七頁）

H ……御衾まゐりぬれど、げにかたはらさびしき夜な夜な経にけるも、（紫上は）なほただならぬ心地すれど、かの須磨の御別れのをりなどを思し出づれば、……（若菜上④六七～六八頁）

女房たちは女三宮の降嫁をE「ただなら」ないものとして、言ったり思ったりするという。紫上は身分の上下があるようであれば、F「ただならず耳たつこと（聞き流すことができない大変なこと）」が起るかもしれないが、女三宮の場合は事情が違うという。昔、光源氏と「ただならぬ」関係にあった光源氏の召人たちは、紫上の味方であるが、紫上の気遣いをあまりなものと思う。光源氏に本心を隠し、女房たちを戒めながらも、独り寝を「なほ」H「ただならぬ心地」と感じる紫上の心情は、言葉通り、穏やかではなく、尋常なものではなかったろう。語り手が推測し、女房が言い思い、それを否定しても「なほ」、紫上にとって「ただならぬ」ぬものであったことが、過剰なほど繰り返される。『源氏物語』全体をみても、「ただならぬ」系の言葉は八〇例ほどであるので、いかにこの場面に集中しているかということがわかる。

H「さびしき夜な夜な経にけるも、なほただならぬ心地すれど」という紫上の心情は、「三日がほど（婚儀の三日間）」のA「事にふれてただにも思されぬ」の「事にふれて」の内実が、一晩中独り寝の寂しさに耐えながら過ごす紫上の心境だったことを描くのである。

時間軸の繰り返し、言葉の繰り返しによって、「言葉」が円環し、改めて意味づけられてゆくといつて良いだろう。

四 円環する紫上と六条御息所

ここまでみたように、紫上は「つれなく」「忍」び、光源氏に本心を見せず、女房たちを戒め、自己の思いを隠そうとしていた。隠していると記されることで、隠さずにはいられない紫上の本心が逆説的に浮かび上がるともいえる。

必死に自制する紫上の姿は、光源氏から「らうたげ」に見え、「をかし」ととらえられる。しかし、紫上の内心は、「命」を天秤にかけて慰めるほど追い詰められてもいた。

I ……なほただならぬ心地すれど、かの須磨の御別れのをりなどを思し出づれば、今はとかけ離れたまひても、ただ同じ世の中に聞きたてまつらましかばと、わが身までのことはうちおき、あたらしく悲しかりしありさまぞかし、さてその紛れに、我も人も命たへずなりなましかば、言ふかひあらまし世かは、と思しなほす。(若葉上④六八頁)

現在の状況と比較して、最も悲しかった時として想起されたのが、光源氏の須磨流離における別れであった。そして、紫上は、あのかきは「ただ（光源氏が）同じ世の中」に生きていると聞くだけでも良かった、「私もあの人（光源氏）ももし命を落としていたならば（今よりもっと）言うかいのない夫婦仲だった」と思いなおしている。

「世」や「命」という言葉は、光源氏が詠んだD「命こそ絶ゆとも絶えめさだめなき世のつねならぬなかの契りを」に触発されたのだろうか。「命こそ絶ゆとも絶えめ（命は絶えるときは絶えるでしょう）」は、紫上のI「命たへずなりなましかば」と通ずると同時に、簡単にD「命こそ絶ゆとも絶えめ」と言ってしまう光源氏の浅はかさも照射

しよう。I「命たへずなりなましかば」と一瞬でも考えてしまった紫上は、「死」を思うほど辛かったわけだが、それでもなお、「思しなほ」したのだから。

このように、物語は紫上の自制心を書いてゆくが、自制しきれていたわけではなかった。

J わざとつらしとはあらねど、かやうに思ひ乱れたまふけにや、かの（光源氏の）御夢に（紫上が）見えたまひければ、うちおどろきたまひて、いかにと心騒がしたまふに、鶏とりの音待ち出でたまへれば、夜深きも知らず顔に急ぎ出でたまふ。（若葉上巻④六八―六九頁）

光源氏の夢に紫上が現れる。当時それは、相手が自分を思うから、つまり紫上が光源氏を強く思っているから、魂が抜け出して光源氏の夢に現れる、というふうに解されるものだった。語り手は「かやうに思ひ乱れたまふ」せいで紫上が光源氏の夢に現れたと推測する。しかも、紫上は「ふとも寝入られたまはぬ」まま、「夜深き鶏とりの声」が聞こえる時間も起きて過ごしていた。起きているにも拘わらず、紫上の魂が抜け出したということになる。

ここで想起されるのが、六条御息所である。

K ……（六条御息所は）人（葵上）をあしかれなど思ふ心もなければ、もの思ひにあくがるなる魂たましひは、さもやあらむと思し知らるることもあり。（略）……一ふしに思し浮かれにし心鎮まりがたう思さるるけにや、すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君（葵上）と思しき人のいときよらにてある所に行きて……うちかなぐるなど見えたまふこと度重なりにけり（葵巻②三六頁）

「もの思ひ」によつて魂があくがれ、「心鎮まりがたう思さるるけにや」とあるように、鎮めることができない物思いの結果、葵上を害する夢を見る。

一方で、男の側の夢に登場することもある。

L 宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕^{まくらがみ}上にいとをかしげなる女ゐて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思はさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと（夢に）見たまふ。物に襲はるる心地して、おとろきたまへれば、灯も消えにけり。（夕顔卷①一六四頁）

寝入った光源氏の枕上に現れた「いとをかしげなる女」は、六条御息所であるとも、廃院の妖物ともいわれるが、この女は光源氏の夢の中で発話している。「おとろき（目を覚まし）」という言葉があることから窺えるように、紫上の夢も、「いとをかしげなる女」の夢も、光源氏が他の女と同衾している時に光源氏の夢に現れているのである。

紫上は J「わざとつらし（恨めしい）」というわけでなかったが、J「かやうに思ひ乱れ」ていた。「かやうに」とは、三節で確認した女三宮降嫁に対する様々な「ただならぬ」思いであった。繰り返される言葉は、読者を立ち止まらせ、前の言葉に回帰してゆく。回帰した言葉の周辺をあらためて比較しながら読むと、「おし消たれたるありさまこよなう」（葵卷②二四頁）と A「劣り消^けたることもあるまじ」（若菜上卷④六三頁）、「つらき方に思ひはてたまへど」（葵卷②三〇頁）と J「つらしとはあらねど」（若菜上④六八頁）のように、無視され負けたと感じる六条御息所、負けることはあるまいと思う紫上、光源氏を薄情な人と思う六条御息所と薄情とは思いきれない紫上とといった形で、言葉の重なりとともに、それが相反する形で用いられていることに気づかされる。

繰り返される言葉は、追い詰められる紫上の心境を如実に描き出す。そんな中、生き霊になった六条御息所と紫上の物思いが重なる。紫上の夢を見てすぐに、紫上のもとを訪れようとする光源氏の姿は、六条御息所への処し方と比べるべくもない。光源氏の裏切りにあっても、「つらしとにはあらねど」と思うところに紫上と六条御息所の性質の差があらわれているのだろう。同じ言葉が用いられることで、六条御息所との違いも必然的に浮かび上がるが、それでもやはり、二人の重なりは、生き霊の一步手前といっても良いようなところまで、紫上の苦悩が達していたことを伝えるものとしてはたらくのではなからうか。

以上、若菜上巻の女三宮降嫁後の紫上の心情を中心に辿ってきた。同じ言葉が繰り返され、肯定されたり、否定されたりしながら、紫上の思いは様々な角度から描かれる。この時点で紫上は光源氏の「夢」に現れたのみであるが、第二の六条御息所という道筋も見える。もし、そうでないとすれば、紫上を「こちら側」に繋ぎとめたのは何だったのか。また、円環する言葉の意味とは何であろうか。須磨巻における光源氏と従者たちの、桐壺院と光源氏の、若菜上巻の女三宮降嫁後の紫上の心情、紫上と六条御息所の「もの思い」、これらの「円環」のあり方、「円環」するからこそ見える「ずれ」もある。人と人の繋がりや巡る因果を示すといえるが、これらについては稿を改めてじっくり考えたいと思っている。

※『源氏物語』本文引用は、新編日本古典文学全集（小学館）による。適宜、便宜上、私に表記を改めた箇所がある。